

「田沢のたっ子」の研究

井 上 章

序 論

郷土の代表的な伝説「田沢のたっ子」の本義を明らかにしたいと思つてゐたが、たまたま学生たちの質問を含んだ感想が、一そう痛切にその解明を迫まるようになった。曰く、

たっ子は「永遠に美しい乙女でありたい」と念じたのに、龍にさされたのはなぜかと。

多く古伝説や昔話などは、教訓を伴つて子女に語られる。たとえば「舌切雀」なら

「……だから欲ばるものではない」

のようにである。

しからば、もし「田沢のたっ子」にそういう教訓をつけるとすると、さしづめ、

「度外れな望を抱くものではない」

「人の分まで食べるような事をするな」

とでもなろうか。しかし、この話がそういう教訓をもつて閉じられる事は、近時の再話ならともかく、本来的には無かつたと思う。仮りにそう閉じると、「人の分まで魚を食べた事」は龍になつた直接的動機ではあつても、本質的な理由ではない。本質的でない事柄を結論的教訓とするのは不自然である。また「永遠の美・命」とも度外れには違ひ

ないが自然な願望であることは誰しも認めるところである。特に、龍になつた事を大願成就として語ることが多いのは、むしろそこに大きな意義を認めている証と思われる。いわゆる逆の教訓ではない。

「たっ子が龍になつた」のは、「たっ子が永遠の乙女美（もちろん不老不死と共に）を祈つた」結果である。そこから解明すべき幾つかの課題が浮かび上る。即ち、

1 たっ子の出生・境遇など——古伝

2 たっ子という名の音声形態

3 たっ子という名の本義

4 背景になつた田沢の土地環境

（稲作上の問題）

5 たっ子の祈願と観音の下した解釈

6 湖の名とたっ子と

7 古伝の吟味

（たっ子は古く、たっ子伝説は新しい）

の如くである。筆者の国語学専攻という立場から当然2、3、に重点があり、他の項については従来 of 所説を引用するところも多いが、地名語源的な解釈からへたっ子伝説の本義に一步迫り得たかと思う。

本論に入るに先立ち、この伝説のあら筋のみ紹介しておく。所伝の喰ひ違いなどから起る問題は本論にとり上げる。

〔たつ子伝説—梗概〕

たつ子は田沢湖院内神成沢（現在の地名）の三之丞の娘で、大へん美しかった。長ずるに従い、その美しさを永遠にとどめたいと願い、一里ほど離れた山中にある大蔵山観音（同神社）に百日詣を行なった。満願の夜、観音のお告げあり、山を越えた所の泉の水を飲めば所願は成就すると教えらる。後、友人と蕨とりに行ったが、昼食どき、川のやまめを焼いたところ空腹に耐えかねて友人の分まで食べてしまった。その直後、激しい渇きに襲われて泉を見出し、それがお告げの泉と知って飲み込む。たちどころに我が身は龍に変ずると共に山は崩れ、水は溜って湖を生じ、龍になったたつ子はその主として住む。たつ子を探した母親が湖に投げ込んだ灯松は変じて鱗になり、湖の特産となった。

本 論

第一章 たつ子子の出生・境遇など——古伝

この課題には、たつ子は実在の人物か？という問題が含まれる。ただ「人間が龍になる」事はある得ず（第一、龍そのものが想像上の動物にすぎない）、仮りに実在であつても話の内容のすべてまでが実在なのではない。

しかし、この「たつ子に擬せらるべき女」は居たと思われる。その理由は、古伝——これも数種あるが——に、たつ子の生れた土地や名前（実は「たつ子」ではない。後記）、父親の名前などを伝えていて、所伝おのおの差があるとは言うものの、それぞれ「あり得べき真実」の一端は伝えていると思われるからである。

知り得る古伝の中、本章に関係するところのみ記載すると、

A 濁ノ主ハ金ガ沢、常光坊ノ娘也。一代死シル事ヲキライ、観音（エ）立願カケ濁ノ主ト成ル、名ハカメツルコト申也。

大蔵神社縁起書（書拔）、享保二十年（一七三五年）——田沢湖町史に所収。以下、便宜上「古伝A」と記すことあり。

B 常（しやう）巖坊（むすめ）ガ女（むすめ）鶴子と云へるが嫉妬ふかくして生ながら蛇身となり、此湖水へ来れり。此水船越へ土中一線の水脈を通じて二竜としに一回は行会ふ事ありと聞えし。

人見蕉雨の「黒甜瑣語」、寛政六年（一七九四年）以下、便宜上「古伝B」と記すことあり。

C 名神鶴子と云。容貌美麗なり、夜毎庭前の梨の木枝に竜灯を挑げ、紅粉を粧ひ、夜更に及て僕一人を伴ひ観音に詣す。里程既に二里、百日に及ぶ。

「秋田風土記」、文化十二年（一八一五年）による。

以下、便宜上「古伝C」と記すことあり。

D 養老の昔大倉山の麓に金鶴といえる麗人ありしが、二八のおもかげかはらで歳の積れる事を大倉山の御神に祈念をこめ夜ごと五更を期とし詣しに、：

佐竹義文筆録「養老紀行」、文政七年葉月十八日（一八二四年）

——「タツ子姫伝説と田沢湖（戸沢角城、御座石神社発行）。以下、便宜上「古伝D」と記すことあり。

E 往古仙北郡院内村神成沢に三之丞なる家ありて、一人娘辰子（一説には常光坊の娘、亀鶴又は金鶴子とあり）棲めり、この娘天成の美人にて、……いでや霊顯いやつこなる我が氏神大蔵山観世音菩薩の御懷にいたかれて、神の御子と為り、二八の儘の麗容艶姿をば永へに保たばやと思ひ立ち、：

千葉源之助「田沢湖案内」、明治四十四年（一九一一年）刊。以下便宜的に「古伝E」と記すことあり。

F古伝Eを紹介したヘタツ子姫伝説と田沢湖には、辰子は「母・共・棲めり」となっている。古伝Dと同書

右に記載したとおり、本物語の主人公の名は元来「たつ子」ではない。では、何かという一定しないが、まず「鶴・亀鶴」あたりが本と思われる。ただしこれも、不老不死（永遠の美）を願った事と「鶴は千年、亀は万年」とされる事との付会とも考えられるふしがある。娘の名に「金・神」を冠するのはやや不自然の感を免れない。

〈秋田県の地名（平凡社）〉の「田沢湖」の項でも「辰子・たつ子」の名は明治以前には出ない点を指摘され、有益な示唆を与えているが、課題となるのは本名の詮索より「辰子・たつ子」とされるようになった過程乃至その可能性を明らかにする事である。

第二章 「たつこ」という名の音声形態

既に仮名表記で「たつこ」として来たように（「辰子・たつ子」の場合別）、地元の人々は「たつこ」と促音に発音する。「たつこ」というのは新しい発音である。この関係から見て行こう。

語尾に「子」のつく女子名の歴史は奈良時代まで溯ることができ、この土地の名づけとしていつ頃から一般化したかも調査する必要がある。しかし、前掲「古伝A」からしてカメツルコとあるから、「子」がつく事にはまず問題がない事にして論を進める。

秋田県の方言的発音ばかりでなく、共通語的にも、次のような名前を気軽に親しみを以ていう時に一種の音便（促音化）が起こる。

初子 はつこ↓はつこ

光（満）子 みつこ↓みつこ

幸子 さちこ↓さつこ

徳子 とくこ↓とつこ

咲子 さきこ↓さつこ

利（敏）子 としこ↓とつこ

これらは、「子」でなく愛称接尾辞の「ちゃん」をつける時にもあらわれ、類似ケースは男子名にも及ぶ。「幸子 さちこ↓さつちゃん」「熊さん八っさん」などである。

この音便の一種は、「つ・ち・く・き」などの破裂音や、狭まり強い「し」などの音節が、いわゆる促音になるものであるが、これが起くるのは、その名前が頭高のアクセントである場合のようである。

「徳・咲」は、単独ではトク・サキで平板型であるが、「子」がついた時はやはりトクコ・サキコと頭高型になる。「龍・辰」は単独で言うときには平板型タツであり、「男・雄・夫」がついて男子名になったときも同じくタツオで平板だが、「子」がついて女子名になった場合はタツコと頭高型に変化する。

このように、アクセントは、その語の単独・複合などの場合に依じて微妙に変化するものである。「たつこ」の場合、現代聞かれる発音で言うところ

田沢のたつこ たつこの遺跡

たつこ姫 たつこ伝説

の如くであり、現代は大体、単独で言う時頭高型だと思われる。しかし、土地の古老たちの発音による限り「たつこ」は頭高型とは言えない。従って「たつこ」は、本来「辰子」から転化した発音とは考えられない。

この事は、前記の「辰子・たつ子」は明治以前に溯ることができないという事と符合すると思われる。

そこで、本来の名は（カメツルコなどは、ひとまずさし置いて）「たつこ（アクセントは平板型または軽い尾高型）」として考を進めなければならぬ。

ついでに言うと、「たつこ」と促音表記してあるが、秋田方言で語中

（音節結合単位の中）に促音が入る場合、一音節と言うに十分な長さとは与えられない事が多い。場合によってはほとんど無いに等しく短縮される。

取って来い とてけえ

奴 やこ

従って「たっこ」の場合、むしろ「たこ」とされてもいい程、詰めて言われる事が多いのである。

さて、もう一度ふりかえって見るべき事は、今まで説明の便宜上「辰子・たつ子」との関係の方から述べて来て、「たっこ」は「辰子・たつ子」の転じた発音なのではないという結論に至ったが、その「たっこ」をもっと一般的な形に結びつけて考える必要があるという点である。

国語で、ある語（音節結合単位）の中に破裂音音節がある場合、その前に促音を入れる例が多い。特に強調した発音の場合（「急呼」とも言われ）あらわれやすい。

四日 よか↓よっか

先 さき↓さっき

早 とく↓とつく（とつくに）

良 よく↓よく

にここに ↓にっこり

この点で、「たっこ」はむしろ「たこ」から考えるべき筋が浮んでくる。その場合「こ」が名詞的構成要素であるとすれば（その可能性は高い）、音の連接上「たこ」となる（いわゆる連濁）事も十分可能性がある。次章において「（田沢の）たっこ」を有名な万葉歌の「田子（の浦）」などと結びつけて考えるのであるが、その音声的理由はここにある。

「田沢湖」においても「田子」と結びつけて考えるべきことは（女主人公の名から一旦離れるが）、外ならぬこの湖畔に「田子ノ木」とい

う地名の集落があるからであり、またその「田子」がこの湖の名にまでされて「田子湖」とよばれたからである（明治六年〈堤防絵図面〉湯村総代千葉廣衛門）。

この「田子（ノ木・湖）」のアクセントは、古来の「田子のたっこ」と同じく、ほとんど平板である。これによっても、「田沢のたっこ」は本来的には地名につながるものであらうと考えられる。

田沢湖の一名称が「田子湖」である事とともに、もう一つ、漢字表記では「榎湖」として「さっこ」とも言った（三浦久兵衛・田口佐藤右衛門両氏による。注一、参照）

この「さっこ」については、次章において「たっこ」の語義と共に考えるが、非常に有力な材料である。これは一般に、

明和六年（一七六九年）益戸滄洲が田沢湖を訪れ〈間榎紀行〉を著して以来、文人たちに「榎湖うききのかた・漢榎湖」とよばれるようになったもので、滄洲の命名と考えられる。（〈秋田県の地名〉平凡社）

とされている。ただ、表面的にこれによると、いかにも「榎湖」の字音として「さこ（さっこ）」と言われ始めたというようにとれるが、滄洲は地元の人が「さっこ」と言っているのを聞き、しかも「榎」を「浮木」の意にあててゐる事ができるのを合せて「榎湖（サコ・うききのかた）」の名を案出したと見るべきものである。

第三章「たっこ」という名の本義

まず有名な所、全国的視野でとりあげるべき所から述べよう。

1（田子（児）の浦）

現在は静岡県富士郡（富士川東岸）の地をいうが、当時は庵原郡（富士川西岸）の興津川から東の蒲原・由比両町あたりの地だったらしい。

○昼見れど飽かぬ田児の浦大君の命かしこみ夜見つるかも(万・三・297)

○田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける(万・三・318)

○おくれ居て恋ひつつあらずは田子の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る(万・十二・3205)

これらの歌の内容には「たご」という地名の意味を示すものではない。むしろ右に記した「蒲原・由比」の両町のあたりという、この地名は、まさに「田子」の意に一致する点で極めて大切である。

2(仙台市田子)

仙台市の東部(中心より約8km)、七北田川とその支流との合流点。仙台―石巻を結ぶ「仙石線の福田町駅より1kmほど南である。この「福」

は川の合流点によくある地名(土地が肥沃である事によるという。福島・福田など)で、「田子」の意と密接にかかわる。

3(富山県能登半島、上田子・下田子)

○汝が恋ふるその秀つ鷹は松田江の浜行き暮し鰯取る氷見の江過ぎて多古の島飛び徘徊り、葦鴨の多集く古江に一昨日も昨日もありつ、:(万・十七・401)

○多胡の崎木の暗茂に霍公鳥来鳴き響めばはだ恋ひめやも(万・十八・405)

○十二日、布勢の水海に遊覧し、多祢の湾に船泊てして、:(万・十九・419 詞書)

○多祢の浦の底さへにほふ藤波を挿頭して行かむ見ぬ人の為(万・十九・420)

能登半島東南部氷見市の東南。川の合流点より上田子・下田子は少しはずれているが、右の歌によって入江・湾の近くの湿地の相が知られる。

4(多胡)

○吾が恋は現在も悲し草枕多胡の入野の将来も悲しも(万・十四・3403)

○多胡の嶺に寄せ綱延へて寄すれども、あにくやしづしその顔よきに(万・十四・3411)

群馬県多野郡多胡村(現在吉井町)、高崎市の南方7kmほど。この付近一帯は、南牧川・雄川・鮎川および微細な支流の集る所である。郡名「多野」の「多」も「多胡」と同じであろう。

5(多古)

神奈川県小田原市の北、2.5kmほど。有名な二宮尊徳の出身地の南3kmほど。例の酒匂川と洞川の合流点。

6(田子倉)

「田子倉ダム」ができて急に知られるようになった。福島県只見町。只見川に白戸川などが合流しているところ。付、「手児」も同じではないかと言われている。

全国を子細に調査する時間的余裕がなかったが、平凡社「世界大百科辞典」付録の地図および索引で見出した中から主要な所を拾って示した。(奈良県吉野川、宮崎県綾南川にも数似地あり)。

これらによって、ひとまず地相上の共通点を求めるならば、直ちに一つの結論が浮んでくる(ただし、古代から地形が極端に変化していないという前提で)。

2・6は、明らかに川の合流点である。それが海岸に近い2、3、内陸部4、6、特に峻しい山間の谷川の合流する6など、それぞれであるが、みな川の合流点である。しからば、「合(流)」という所に本質的な意味があるのかというと、1は海岸近いところで川が分岐している、2・6と反対である。故に「合流・分岐」いずれとも決定でき

ない。しかし、互に反対の例があることは、むしろこの場合好都合で、「合流・分岐を問わず、両者に共通する土地相」が「た・こ・た・こ」と言われるのだという事になり、音声上の多少の相違、漢字の宛て方の相違などは問題にはならない事がわかる。これ程明瞭な地相上の共通性が見出されるのは驚くべき事である。

以上、全国的な目で「田子」等を見て来たが、ここで、直接的関係が深いと思われる東北地方に限り、「タツコ」と促音に言われている地名を示す。

1 (田子)

青森県三戸郡田子。馬淵川の上流、熊原川に杉倉川等が合流する所。

「下田子」も近くにある。

2 (達子)

a. 秋田県山本郡山本町。三種川と支流二川（小さい流れであるが）が合流する所。三種川をはさんで、「達子」「向達子」の地名がある。三種川は小さいが曲折が多く、達子は平坦な氾濫原である。

b. 秋田県北秋田郡比内町扇田。犀川の流路が変わってできた小規模の河跡池のあるところ。

これらと音転の関係にあるものとして「トコ・トッコ」がある。おそらくこの「o」音に同化したものであろう。（トッコについてはアイヌ語説あり）

3 (床舞)

秋田県雄勝郡西馬音内町。雄物川に注ぐ西馬音内川の支流が細かく枝分れし、田の灌漑水路となっている一部。

4 (独鈷)

秋田県北秋田郡比内町。犀川と炭谷川の合流点。少し離れているが味噌内川も合流している。

音声的には更に合音化（口の開きの少ない音に転ずる）して[u]音になったと思われるものに「トク」がある。

5 (徳瀬)

秋田県仙北郡協和町。荒川の支流の宮田又沢川が蛇行している（顕著な合流点は少し離れている）。なお、この地名について、菅江真澄は「徳勢（古くは瀬でなかったか？）は仮字作にて、元ト疾瀬、速川を云る村名なるべし」と言い（八月の出羽路、仙北郡一菅江真澄全集第七卷²⁵p.）、見解を異にする。

6 (徳沢)

秋田県由利郡岩谷町。芋川が曲折して流れているところに小さな沢が二筋合流している。

「向徳沢・下徳沢」の地名が隣接している。

トクラも同じかと思われる

7 (トクラ)

秋田県雄勝郡東成瀬村。成瀬川が曲折して流れている片岸に、小さな平地あり。ただし顕著な支流などはない。

なお細かくとりあげればまだあるが、ひとまず打切りとして先に進む。

これらの地名の語源・意味についての説を批判しておく。

a. 「高」の意味とするもの

国語一般から言うと「高」が後接語頭音との関係で変化した形として「タケ・タコ」があげられるのは、たとえば

高市 たかいち↓たけち（奈良県—現在は「たかいち」が普通のようである）

の例は古典に徴して正しいが（多気知—古事記、

田高・田高良・高向（いずれもタコウ）へ地名の語源）鏡味完二・鏡味明克、角川。

の字音コウは宛字の可能性もあり、なお客観性は十分でないようである。

ところで、上述の「タツコ・タゴ」などが「高」の意であるとは首肯できない。第一に、前述の「田子（児）の浦」は海岸である。その他の例も川の合流点、氾濫原などで、むしろ平地である。たとえ「田子倉」のように山間の高地にあっても、高い所だという事でその名があるのではなく、そこが水の溜るところだと言うにある。高いというなら両側の山の方がずっと高いのである。

第二に「高（たか）形容詞語幹」が名詞を伴わないであらわれ、しかも「か」が^o音に転じるというのは不自然である。

b. 「蛸」の意味とするもの

筆者も指摘しているように「タツコ・タゴ」は川の合流・分岐点に当たっている。その平面上の形は「蛸の足」が似ていなくもない。現に、湖・湾に面した類似地相に「蛸川・蛸（蛸島）」などがある（箱根芦の湖、岩手県大船渡湾・（能登半島突端）

しかし、この名の土地がすべて「蛸」の意で名づけられたとは考えられない。第一に「蛸」にたとえるほど、流れの数が多くないのが普通である。第二に、川において「蛸」にたとえるなら、道路にも同じ比喩がありそうに思われる。その意で「蜘蛛手」ならば、川・橋・建造物・縄などについて広く使ったが「蛸」には判然した所が前記の例しかない。

わが田沢湖にも、その南岸に「田子ノ木」集落がある。この名について土地の人ほとんど説を持たず、せいぜい「蛸のような枝ぶりの木があったからだなどと言うが、結局よくわからない」と答える。まして「田子（木）」という樹種があるのではない（「蛸の木」という樹

種はある。ただし小笠原島などの暖地の産である）。また、「これが田子の木だ」という特定の一本があるのでもない。

第三に「蛸」の発音なら「たご（鼻音にならない）」であって、「たっこ」にはならず、また「田子（たご）」の^oは鼻濁音であって音声的に合わない。

さて、地名学者によっても、また地方の民間語源によっても、「蛸」説が出されているのも興味はある。

c. 「ただ一つ」の意味とするもの

東北に多い「田ツ子・田子」はアイヌ語のタクピ（ただひとつ）の意かも知れない、とするのは山口弥一郎^③氏で、この説は疑を残しながらも地名辞典に引用されている。批判すべきは第一に「ただ一つ」の意に結びつく理由がない。こじつければ「川が合流してただ一本になる」の意か？ すれば逆に分岐もあった、という点で行き詰ってしまう。むしろ「ただ一つ」とは反対に複数の川筋がある事の方が現実的である。

第二に、もしアイヌ語だというならば、同様の名づけが北海道にあつて然るべきである。その点、アイヌ語語源が間違いないとされる「ナイ（川・谷）・ベツ（川）」などは言うまでもなく北海道に多いが、「たっこ・たご」はない。この事は、逆にやまとことばである証となし得よう。

改めて言う、と、「たっこ・たご等」は、川の合流・分岐点に当たって、川筋の多い平地床の字はこの点で意味の一部に当たっている、古くは湿地帯である（現在は土地改良の諸工事がなされ、湿地の俤を見ることが少ないだろう）。

なお、地名学者によって示されている次の如き語（地名）例は、や

はり比較して検討すべきであるが、問題は残る。

「地名の語源」によると、大略次のとおりである。

〔ト〕アイヌ語で「湖沼・湿地」等の意

上沼（ペンケトー） 苫小牧（トマコマイ） 湖沼

戸賀・斗賀（トガ）

土田・戸田・富田（トダ） 鳥羽・戸波・騰波・

樋場（トバ） 戸部・砥部・富部・戸辺（トベ）

〔トロ・ドロ〕アイヌ語で「水の溜る所」の意味。

土呂・登呂・当呂・都呂・戸呂・瀨・淀・洞など、トロ

土呂・土羅・泥など ドロ

土庫・道後 ドンゴ

堂・田・頓田・土田 ドタ

〔タイ〕同じく「山間の低湿地」

袋 萩袋ハギタイ・母袋モタイ

まだ多く記載されているが、省略する。最後に一つだけ付け加える。

〔タンボ〕

湿地・沼地の意（愛媛・九州各地の方言）

水溜り・溜池（各地）

多少語形が違うが「ダンブ・ダンブリ」も同意であり、そこに生育するのが「蜻蛉」でこれをダンブ・ダンブリ・ドンバなど言い、それが一般称「トンボ」に通ずる事は北条忠雄先生の論考されたところである。

さて、田沢湖の場合を視野に戻しつつ、もう一つあげておくべき類似意味の語がある。

〔サコ〕湿地・狭間・小さい河谷（地名の語源）。

せまく細く行きつまったような谷（地名語源辞典）。

なるほど「さこ」は「たっこ・たこ」ほど一般的でなく地名例が少

ないが、これがある事は田沢湖を理解するのに強力な助けとなる。

先にも述べたように、田沢湖を「榎湖・サコ・うききのかた」と呼んだのは、益戸滄洲の名づけとされているが、田沢湖は一方「田子濁」と呼ばれた事が確実であるから、むしろ「タツコ・サツコ」という名が先にあって、滄洲がそれに文人らしい宛字「榎湖」を与えたと見る方が自然だと考える。

ついでに「田沢」にふれると、「田子」と同じく一般的地名であり、東北地方に多い。秋田県内を五万分の一地図でざっと見ただけで、田沢・田ノ沢・雁田沢あわせて九か所見つけることができる。地相は「田子」に類似している。

以上、「たご・たっこ・とっこ・とつこ・さこ・さつこ」などの地名の所が、ほぼ共通の土地相をもっている事を述べたが、ここで、これらの音声的対応を述べ、相互に対応する事を述べよう。

一、「たご」対「たっこ」

以下、同一語またはほぼ同じ意とされる語で、「たご型」対「たっこ型」の音声対応をもつものを示そう（ただ、両型とも多少バラエティがある）。

「類・耳」などについて、肉が「たぶたぶ」している様によって「類たぶ・耳たぶ」という。へ日本国語大辞典 小学館によると、

類たぶ 仙台・福島・茨城・栃木・千葉・岡山（浅口郡）・徳島（美馬郡）・大分（南海部郡）など。

耳たぶ かなり共通的

これに対し「たぶ」が「たば」となるのは、

類たば 岐阜（山県郡）・徳島県など

耳たば 千葉・八丈島・岐阜・飛騨地方・鳥取・広島・周防大島・

豊後地方など

がある。これらは一往方言と見られているようであるが、掲載の地方ばかりでなく秋田でも「類たぼ」が使われたし、またさほど際立った方言というのではない。しかるに、「耳たぶ」には「ミミタンポ・ミミタップ」の言い方が秋田にあり（秋田方言）秋田県学務課編纂。筆者も河辺郡雄和町で録音）、これは他地方で採録された例に接しない（ある可能性は十分あるが）。さて、これは、

たぶ↓たぼ↓たんぼ↓たつぽ

と転じていて、これに「たご」を並べると、

たご——→たつこ

と対応する。

「一位」の木は「御子おんこ」という（東北地方）一方、「おっこ」という（秋田方言）。

おんこ↓おっこ

本来、対になっているもの一方が揃わぬことを「跛ちんば」という。それが目に於いては「目っかち」という（共通）。この「かち」に当る部分を「かんじ」という。

「乱舞」は現在「らんぶ」として疑われないが、中世・近世にかけて「らっぶ」という発音も行なわれ（共通語として）、《節用集》やキリシタンの《日葡辞書》にも収録されている。

らんぶ↓らっぶ

「事だ（名詞十断定助動詞）」の発音が、特殊な場合のみだが、

…こんだ（道中各地の人に使われる）

…こった（弥次郎・北八に使われる）

の両形が、《東海道中膝栗毛》に見える。

推量助動詞「べ（し）」を用いる方言では、たとえば、「そうだろう」に当るのは

んだくべ 注、くに軽い鼻音あり

んだつべ（秋田県内では山本郡・南秋田郡の一部あたりに多い）
文末の助詞（トヨを源とする）は、

んだくでや（たとえば秋田）注、くに軽い鼻音あり

んだつちや（たとえば仙台）

のように対応する。筆者はこういう音声的対応を「鼻音+濁音」対「促音+清音」の対応とし、略して「鼻濁対促清」と呼んでみている。たとえば、

とんぼがえり 鼻音+濁音 鼻濁

蜻蛉返り

対 対

とつぽんぎやり 促音+清音 促清

（パ行子音は無声音で完全な清音であることは、言語音声学では常識）。「とつぽんぎやり」は、稀に秋田で用いた。

の如く応用する事ができる。この音転の型は、時代的にも、方所的にも、品詞的にも、かなり広くあらわれている。

これによって「田沢のたつこ」は、共通語ふうに言えば「田沢のたご」とすることができ、内容的には何ら異らぬ。

二、「たつこ」対「とつこ」

先に記したアイヌ語語源説でトツコを見れば、タツコとは対応できない。さて、筆者は「田子たつこ」が北海道に見られぬ事から、やまとことばと考える。トツコのトは、後のコの[ɔ]音に同化して、前もって同一母音に転じたものと見たい。

三、「たつこ」対「さつこ」

サ行音の古音は「チャ・チ・チュ・チェ・チヨ」の如きものであった。完全に同音ではないがタ行音に類し、同一意味で、サ行対タ行の対立をもつものがある。

ふさぐ↓ふたぐ 消す↓消つ

さね——たね（実核）

ただ、この対応が具体的にあらわれたのはせいぜい平安朝までで、それ以後は痕跡に残ったにすぎない。従って「たっこ・さっこ」が語源的に対応するとは断定しかねるが、その可能性はある。

四、同一地相における地名の相互関係

上述の地名の意味を確かめるために、同一川筋をたどって、類似地相の場所の名前を相互に比較してみる。これによって、単独では不確実でも、関連によって遙かに確実性が高められる。

1 平鹿郡増田町

東成瀬川に、南から大沢、北から真木沢・岩の目沢・不動沢などが合流するところに「田子内」があり、ここは集落「平良（たいら）」を含む。更に上流の「手倉」も関係があらうか。規模は小さくとも、川の合流点（その付近）で、やや平らで、田が作られている。

2 北秋田郡比内町

大館市そのものが、米代川・長木川・下内川などの合流点で、その館という名も無関係ではないと思われる。この米代川に流れこむ川として犀川があるが、扇田町のあたりは両川が接近して並流している。そこに平野あり、点々と小沼池あり、ここを「達子たっこ」という。その3kmほど上流で、犀川に味噌内川・炭谷川が合流する辺に「独鉆とっこ」があり、この「たっこ」「とっこ」の関係から言っても、片方のみアイヌ語とは考えたくない。

また非常に古くはアイヌ語源でも、やまとことばに同化した形で使われている（たとえば「たっこ・とっこ」の「こ」は「所」の意のやまとことばと考えたい）と思う。

さて、こういう土地こそ「稲作」に手っ取り早い用地であって、現

実に今も「田」があり、文字にも「田子」が多く使われている。すると、これこそ「田」なのではないだろうか？ 人為的に田作りする以前から、実際に利用できた「水田の起源的用地」なのではあるまいか。

田沢湖畔に戻ってみる。南側岸に「田子ノ木」集落があり、ここは湖周全体の中で最も田がひらけ、人家の多い所である。これと並ぶのが「大沢」で、これまた田・人家が多い。この辺を総称して「潟かた」と言う。外輪山（山頂）は、この部分において最も遠く、それだけ平地（ゆるい傾斜地）が発達している。

もちろんその中には稲作のできる沢水が流れている。

そして、この湖（ただし一部かも知れない）を「田子潟」とするのは、やはり稲作に裏付けられて最大の集落がある所なるが故に、代表名にされたと見てよい。この場合「田子ノ木潟」とは書いてないから、やはり「田子たっこ」というのが中心的な名前であらう。

こうしてみると、「田沢のたっこ」は小さく名の知られぬ所、「田子の浦」は万葉集にも詠まれた有名な所、こちらは湖岸、そちらは海岸というだけで、何ら異らぬものと言うべきであり、山中または平野部の湿地（これは、できる限り「田」として利用した）とも本質的には同じである。

第四章 背景となった土地「田沢」について

前章に述べたとおり「田沢」は一般的な地名であるが、田沢湖の近辺では、言うまでもなく（旧）田沢村（現「田沢湖町田沢」）である。この村名は天正十八年（一五九〇年）に既に見えていて、近辺では生保内村と共に古く開けていたと考えられる。この田沢村と生保内村にはさまれて、支郷の「先達」、また「石神」集落がある。この石神から田沢湖畔に出たところが「春山」である。そしてこの「石神・春山」ともに縄文時代に属する古代遺跡がある。外輪山はこの付近で最も低

く、湖水も比較的遠浅である。

従って人的交流などは概して田沢村と大きく結ばれていただろうから、その「田沢」が湖の名にとり入れられても不自然ではない。

これと、前述の「田子ノ木」「大沢」集落が最も広く人家人口も多く、その「田子」が湖の名にとり入れられて「田子潟」と言う事とを合せ考えると、この湖の名は、ここに住む人と生業（主に農業・稲作）に結ばれていると考えざるを得ない。

ついでに述べると、この湖は、ずいぶん色々に呼ばれたようで、

「田沢池」〈出路一国絵図〉正保四年（一六四七年）

「八郎潟」〈奥羽国郡分色図〉慶応四年（一八六八年）

「田沢潟」〈堤防絵図面〉潟村総代千葉廣衛門 明治六年（一八七三年）

「田子潟」（「田沢潟内・田子潟」という表記から一部分か？）出典 同右。

などが主なものである。関連事項は第六章にものべる。

なお一つ加えると、この湖を「八郎潟」と呼んでいる〈奥羽国郡分色図〉では、この湖の南西、潟・尻川の北、雲・然の南に「田沢」と記入している。十分正確かは疑わしいが、「田沢」の名は、かなり広く用いられた証とはなし得ようか。

さて、伝統の主人公「たっこ」の生地はどこか。現在は「田沢湖町」に入ってしまったが、もとの所属は「神代村院内神成沢」「院内村神成沢」とされるように、田沢ではない。

ここに行く経路は、神代または生田からほぼ北に入り、岡崎を経、院内川を遡って上院内に入り、集落を通りすぎた最も奥の一軒家に至る。そこが「たつ子」の生家と伝えられている。（注）二軒という記録もある。

そして、この一本道の先方にこそ「たつ子」が百日詣りをした大蔵山観音（神社が並んでいる）があり、その道はやがて薬師峠を経て田沢湖畔の大沢に至る。

従って「たつ子」は、田沢村には直接の縁はないが、この道で田沢湖に結ばれている。

上院内神成沢（地元の人は多くカネザワと呼ぶ）の辺は比較的狭い山間の小平地に水田を耕して農業を営んでいる。

ここで、田沢村をはじめ、ひいては仙北郡の稲作農業が共通にかかえていた問題点をとりあげねばならない。ただし、筆者の専攻領域ではないので、一般に流布している参考文献を整理引用するにとどまる。

○県内には、江戸時代以来多くの先覚と農民たちの努力により、未墾地の原野が開拓されて、みごとな美田に生まれ変わった例がいくつも見られる。奥羽山脈の麓の仙北平野東部地域もその一つで、田沢湖町・角館町・中仙町・太田町・六郷町・千畑村・仙南村の五町二村に広がる地域は、玉川からの利水（田沢疏水）によって開墾が行なわれたところである。この地域は：表土は：保水力が乏しく、下層部は：浸透性の強い地域である。したがって開拓前は、用水不足のために水田化が遅れ、ほとんど山林・原野として放置されていた。この地域が田沢疏水によって開墾がはじめられるのは、文政八年（一八二五年）に着工した御堰にさかのぼる。：（秋田県風土記）（執筆 者＝牧野達夫）

○現在田沢湖町には藩政期を通じて、開拓・疏水工事・飢饉・一揆・産業等に関する多くの興味ある記録が残されており、なかでも玉川毒水の除毒のために一身を投じた田口幸右衛門宗俊の親子三代にわたる功績は特筆される。すなわち、玉川上流の鹿の湯から噴出する強酸性の湯が玉川に流れ込み、これが稲の生育を妨げる毒水となっ

て流域二七〇〇畝の農地に凶作をもたらししていた。：〈秋田県風土記〉（執筆者＝大坂昭治）

それぞれの村についての詳細は、〈角川日本地名大辞典5秋田県〉、〈日本歴史地名大系5、秋田県の地名（平凡社）〉に記されている。

右に引用したように、水が不足なのに、それを補う玉川が毒水なのであるから、まさに水に対する渴望は切実なものであった。それが宗教面にも顕著にあらわれているのであって、この地域に水神・川神・観音・蛇竜雷の信仰・伝統が多いのは当然の結果であらう。

その顕著なものが「水神社」である。角館にもあるが、中仙町豊川の方について述べる。

延宝五年（一六七七年）、用水堰開削工事中、「三十刈（苜）」とよぶ田地の地下約五尺の所から、表面に千手観音等の像を線刻した八稜鏡が出土した。用水堰工事によって見つかった事もあって「水神社」に祀られ、信仰された。この鏡は秋田県にある唯一の国宝である。

次に観音（正しくは「観世音」）は、慈悲救済を本願とする菩薩であり、大勢至菩薩と共に阿彌陀佛の挟持である。観音を信仰すれば、火にも焼けず、水にも流されず、災厄一切を免れるという。

「たっ子」が祈った「大蔵山観音」は、千手観音で秘仏。田村麻呂が阿仁の賊徒征伐に赴く時、祈願し、帰途、鎧の引合せに鑄込んであった観音像を納めたものと伝えている（秋田風土記）参照。

衆生済渡のため、種々の相をあらわすとされ、千手・十一面などもそのあらわれである。

なお、田村麻呂は、清水寺の草創者延鎮のために自分の邸宅を寄進したと言われ（佛教大辞彙）、この清水寺は音羽瀧が常に同じ水量を保っている事をもってその名がある。よって、大蔵山観音は、大いに水に縁があると言ふべきである（一般には馬牛の守護とされる）。また、隅田川中より魚網にかかって見出された浅草寺の観音様の例もあり、古

来観音は水に縁がある。

もう一つ、観音と龍との関係については次章にとりあげる。

第五章 たっ子の祈願と観音の下した解釈

「たっ子」は個人的願望として「永遠の美（命）」を祈った。しかしそれは「人間としては叶えられない」事を知らぬはずがない。よって彼女の祈りは、今生の一身命はなげうって神佛のはからいに委ねたものである。

大蔵山観音は、その祈りを受けて、自分の使者としての龍に化せしめ、この地域に水を恵みつつ支配させるために田沢湖を与えたと解釈される。

同観音と共に神社がある。祈りの主な対象は観音の方かと思われるが、大蔵神社も大国主命を祀るからには大黒天―稲作の豊穰の意味がこめられているのは当然であらう。

「たっ子」の願いは乙女らしいものであったが、観音はそれを昇華させた形で聞き入れ、稲作の豊穰を確かなものにして、土地の人々に恩恵を施し続ける事をもって永遠の生命をさせたのだ」と、この物語は語っているわけである。

龍は、形態・機能など差はありながら、世界的に各民族によって形成された想像上の動物である。基本的には蛇・は虫・類に、鳥・獣・魚等の性能を加えたものである。龍が海と結びつくのは、日本神話の豊玉姫、竹取物語の龍の首の玉などにあらわれ、陸上でも湖沼池に結びついて、大雨の時、天に昇るとされる。この竹取の話も関係するが、龍は「如意宝珠」をもつと考えて、これが所願成就祈念の対象となる。これが、観音の一面と重なって水を司る組合わせになる。観音を祀る寺院の壁・天井などにも多く龍の姿が配され、特に魚籃観音は龍を支配している意味で龍に乗った姿が描かれる。

第六章 湖の名と「たつこ」と

前述のように「たつこ」の願は、本人には考え及ばない形で叶えられたが、とにかく龍になった段階から名前も「辰(龍)子・たつ子」とされて何ら不思議はない。

さて、湖の名を「八郎潟」とする慶応四年の地図はどう解釈すべきか？右の如く若いまま龍になった娘を憐んで物語は男役を配した。それが、もと十和田湖の主であった「八郎太郎」である。ところで、八郎太郎は南祖坊に所領を奪われて今の八郎潟に逃げた。「たつ子」は、敗れたが美男の八郎太郎と情を通じ、八郎は冬期間は田沢湖に来ていと語る。

このように、言わば、「たつ子」の話の後日談ふうの物語ができてからでないと、田沢湖に「八郎潟」と書くことはありえない。そこからこの物語の成立の下限(慶応四年＝明治元年)がわかり、先に「辰子・たつ子」の名は明治以前に見えないとされている事を記したのと時代的にはば一致する。しかし後日談まで成立した下限が明治元年なのだから、「辰子・たつ子」の物語乃至名前は、もっと早く成立していると考えられる。

次に、この湖の名を「田子潟」と記した地図は明治六年のもので新しいが、この名は南岸の「田子ノ木」集落の名でもあり、その集落は湖岸で最も発達した所である。「田子野木」という名は既に享保八年(一七三三年)の記録に見えるから、恐らく湖の名として「田子潟」というのも劣らず古いであろう。

さて、物語では女主人公の名を「龍・辰」にしたい。それを可能にする踏台となったのが「田子タツコ」である。先にものべたようにアークセントは多分違つて合わなかったであろう(「田子タツコ＝平板」「龍・辰子タツコ＝頭高」。しかし、幸いな事にアークセントは絶対的

に固定しているものではなく、こういう理由があれば、この程度の相違は超越してしまう。

ところで、本名は先述のように「鶴」を中心とした名であったにしても、これを「辰子」にするに当って、「どだい龍になったのも当地方の農業を守り育てるためである」という大きな前提がある。従つて、まず、農業に因んだ事物(名)がヒントになる。それが即ち「田沢湖畔で農業のひらけた『田子(たつこ)』であった(この名は「子」がついて女子名らしい趣をもつ事も幸いであった。同じく「こ」が語尾についても「田沢」では「湖」で、女子名に適さない)。筆者の想像では、この娘の名を「田子」と記したのもあったのではなからうか。

第七章 古伝の吟味

以上、田沢湖を囲む地域の人々が水が水を渴望しつつ農事に励み、よい農業水が得られる夢を託して伝説を育てて来た事を述べた。彼等にとつては田沢湖のよい豊富な水が得られたらこの上ない幸いであつたろう。しかし残念ながらこの水は西方潟尻から一筋流出する(潟尻川)のみで、特に東側の田沢・先達・石神・生保内地方を潤す事はなかった。

ここで、古伝に戻ろう。「たつこ」の父を「常光坊」とするもの(古伝A)、「常巖坊」とするもの(同B)、「三之丞」とするもの(同E)あり、これらの中で、実在人物に結びつく人はいないであろうか？

(偉人三之助の碑)石神部落を西に過ぎ、槎湖初めて開く所、自然石の小碑あり。是れ田口三之助が、文化の昔、衆人の為め生命財産を賭して、湖水を疏通し、三十余町歩の田に灌き、二十余戸百余人の、鼓腹の樂を購ひ得し偉功を、万世に伝ふるものなり。

文化年間は、一八〇四―一八一八年にわたる十五年間であるが、こ

〈田沢湖案内〉千葉源之助

の田沢湖の水を引いての灌漑工事を以て大功績者とされる人が「三之助」である。物語で、同名にしてしまうのは余り直接的でよくない。そして実名の「助」より格を上げるわけにも行かない。それで「丞」にされているのではなからうか。とにかく、この近似は決して偶然では起り得まい。そして幕末期の時代ともよく合う。

もう少し考えれば、父を「常光坊・常巖坊」としてあった物語が、父の名のみ後から変更されたかと考えられる。

なお、母親は、「たっ子」を探し歩いた時に手にした灯松を湖畔に投げ捨て、それによって特産の「国鱒（別名「木尻鱒」）を生じさせたと語る。これは、田沢湖の古くからの生業たる漁業に功があったと語っている事になる。

以上まとめると、「たっ子」は田沢湖自身であり、水の支配者である。父はその水を引いて農業に大功あり、母はその湖に魚を産ませて漁業に貢献した。親子三人揃って田沢湖付近の人々の大恩人だという事になるであろう。

一方、父の名を「常光坊・常巖坊」とするのは、名前から十和田湖の主「南祖坊」などと共に修験者の筋につながるだろう（当地方の宗教は、先述の水神社・観音信仰に加えて、密教⁽⁵⁾修験系がある事をつけ加えておく）。そうすると、古伝Fのように「（娘は）母と共に棲めり」と言つて父不在を匂わすのも理由ある記事となる。父は山野を歩き続けているのである。とすれば、百日願を果した「たっ子」も父親の資質を受け継いでいることになる。

最後に娘自身について、美人と称える一方には、「狂女」の相を記すもの（古伝B、C、）あり、特に夜中化粧して観音に詣でたというCには尋常ならざるものを感じる。しかし、現在、主として語られているのは古伝Eのような、美しく気立てのよい「たっ子」である。実は、だからこそ龍になった事に不自然を感じるのであるが、それは現代的

感覚である。本論には「龍になった意義」を述べたと共に、神仏の使者たる龍になるためには、まず本人が邪悪であってはならぬ事をつけ加えておこう。農を営む人々の清純な気心が、この物語を清純な筋の方に運んで来たのであり、それはこの上なく「よい」事だと思う。神仏も「たっ子」を嘉みし、田沢湖という天然の美しい姿に変えて、永遠の美を見事にとどめて見せている、こういう語り方をするのがやはり「田沢のたっ子」の本質に即したものだと思ふ。

注

- (一) たっ子茶屋、三浦久兵衛氏、田沢湖町立郷土史料館、田口佐藤右衛門氏らによる。
- (二) 〈開拓と地名〉 山口弥一郎
- (三) 〈地名の語源〉 角川小辞典。〈地名語源辞典〉 校倉書房。
- (四) 同石碑は現在、湖畔の春山にある。またこの疏水路は、湖畔の生活排水の水路として再利用されようとしている。
- (五) 〈角川日本地名大辞典5 秋田県〉へ日本歴史地名大系5、平凡社、秋田県の地名〉などによる。